

たんのともふみ
丹野智文さん

「若年性認知症」

「若年性認知症の実態」

認知症は、高齢者に多い病気ですが65歳未満でも発症することもあります。現役世代で認知症になると仕事や子育てに大きな影響があることが一般的です。全国に若年性認知症の診断を受けている方は約40,000人であり、発症年齢は平均51.33歳で約3割が50歳未満で発症されています。また、発症から診断までに時間がかかることが多いと言われています。(厚生労働省)



丹野智文さん プロフィール

- 1974年 宮城県生まれ。東北学院大学を卒業
- 1998年 トヨタ系列の自動車販売会社に就職
トップセールスマンとして活躍
- 2013年 39歳で若年性アルツハイマー型
認知症と診断を受ける
- 2014年 国内初の当事者団体「日本認知症
ワーキンググループ」を設立
- 2015年 認知症の人が、不安を持つ当事者の
相談を受ける「おれんじドア」設立

著書「笑顔で生きる - 認知症とともに -」(文芸春秋)

インタビュー・文責：兵庫県社会福祉士会広報委員 小椋智子

若年性認知症の 当事者について

越智俊二さん

2004年に、京都市で開かれた国際アルツハイマー病協会国際会議で、多くの参加者の前で「もの忘れがあっても、いろいろなことができます。考えることもできます。あきらめずに生きていけるように、安心して普通に生きていけるように手助けをしてください」と訴えました。日本で初めて認知症の当事者が実状や気持ち

を伝えたことで、社会が認知症について深く考えるきっかけになりました。

それから9年後の2013年、丹野智文さんは、39歳の時にアルツハイマー型認知症の診断を受けました。

越智俊二さんが語った「病気になることは本当にくやしいです。なぜと思う気持ちや、自分が自分でなくなる不安もあります。家族やまわりの方たちのおかげで、いいほうに考えることができます。これからの望みは、良い薬ができてこの病気が治ったらもう一度働きたい。どんな仕

診断当初のこと

アルツハイマーの診断を受けた時はどのような状態でしたか？

「いろいろな情報から認知症」

笑顔で生きるということ

どのようにして病気を
受け入れたのですか？

前向きになったのは、私より先に不安を乗り越えた当事者の笑顔で、人に優しい当事者との出会いからでした。この人のように生きたいと思ったのが最初です。認知症の診断を受けて、これから先、どうなるのだろうと不安で仕方がなかったとき、前向きにしてくれたのは、自分より先に診断を受け、その不安を乗り越えてきた認知症当事者の方々との出会

いだったのです。そして、

「多くの支援者との出会いで安心が出てきて笑顔になれたのだと思います。仲間からは最初は、作り笑いでも良いから笑ってなさいと言われました。そこからほんとの笑顔になったのです。」
認知症を悔やむのではなく、認知症と共に生きる道を歩み始めるためには、多くの人の支えがありました。忘れたことを、怒らず教えてくれる家族や仲間から力を得て希望をもって生きているから笑顔が素敵なのです。



認知症と共に6年、「人とのつながり」で自立が進む。



普通にお酒も女性も好き。